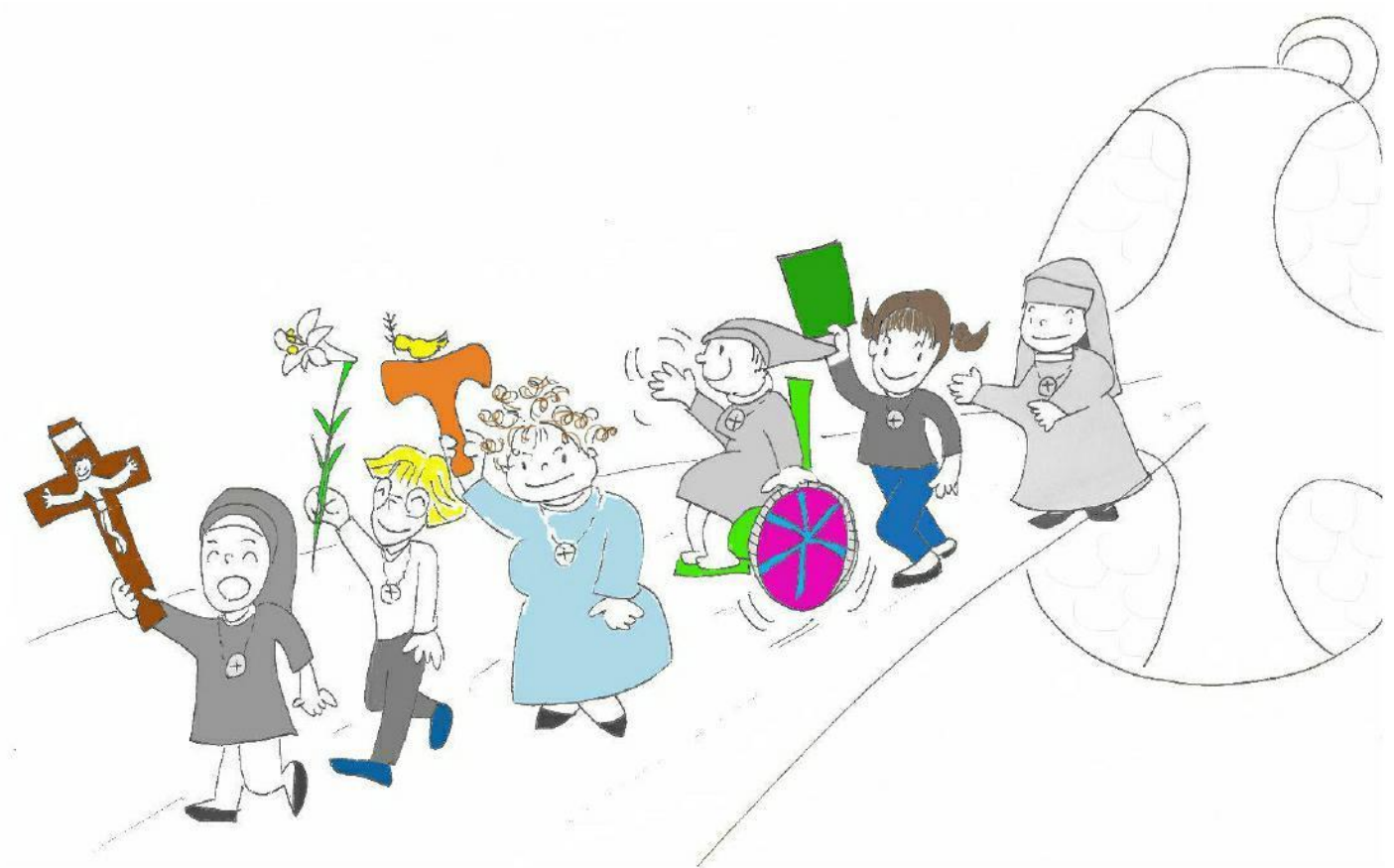


さあ、はじめよう！



マリアの宣教者フランシスコ修道会

Franciscan Missionaries of Mary

マリアの宣教者フランシスコ修道会



Here I am
マリアのように“はい”と応えて

キリストに従う者としての生活を選んだ私たちは
キリストに似た者となられたマリアの生き方を
わたしたちの生き方とします
無条件に自分を神に差し出したマリアに倣って
人々の必要に応えるために いつでも どこにでも 行く覚悟です

In the Spirit of St. Francis of Assisi
アシジのフランシスコの精神で



フランシスコの家族の一員であるわたしたちは
神の国をめざす旅人のように 自由な者としてフランシスコに倣い
ありのままの姿で 解放された貧しい者の喜びを
今日も 世界中の兄弟姉妹と ともに生きたいのです



Inspired by the Eucharist
聖体から力を汲んで



本会の偉大な宣教者は 顕示され 礼拝されているイエスです
私たちの生活の中心にいてくださるイエスを礼拝し
自分自身と人類全てを捧げます
ご聖体のイエスから遣わされ 兄弟姉妹のもとに行き
彼らの中におられるイエスに出会います

詳しくは <http://www.fmm.jp/> まで

マリアの宣教者フランシスコ修道会 創立者マリ・ド・ラ・パシオンの生涯

はじめに

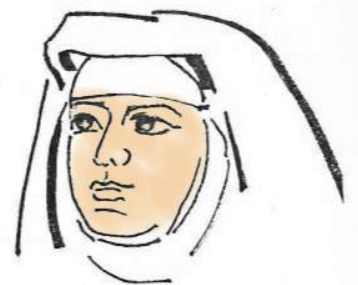
この女性、マリアの宣教者フランシスコ修道会の創立者マリ・ド・ラ・パシオンの生涯と人柄を皆さんに簡単に紹介します。

彼女は、存在そのもので福音を生きた女性でした。勇敢で熱意に燃えていた彼女の目的はただひとつ、「世界中にイエス・キリストの福音を宣べ伝えたい」という望みでした。彼女の生き方は、愛、それも限りない無条件の愛そのものでした。目に輝いていたその愛は、彼女の心からあふれ、その手のわざを導いていました。「イエス・キリストへ人々を導くために、どこへでも海をわたって行き、自分の命を与える覚悟があるように！」と、彼女は、シスターたちによく言っていました。世界中が、彼女にとっての祖国、すなわち助けを必要とするところ、飢えや渇きのあるところならどこでも、彼女たちのいるところだったのです。このような彼女の深い望み、動かしていた霊の力、主キリストへの愛が、伝わってきますように！

1. Come and see

来て見なさい！このすばらしい女性を、
どんな危険にも挑戦にも向かっていこうとする この人を、
イエス・キリストを知らせ、その愛を伝えるために
喜んですべてをかけようとする この人を！

「私は、何百のいのち、何百もの声が欲しい、
すべての人のところに行って叫びたいから、
あなたたちの知らない方が、あなたたちの中にいます！と…」



キリストにすべてをかけていたこのダイナミックな宣教者、マリ・ド・ラ・パシオンがマリアの宣教者フランシスコ修道会の創立者なのです。

子供時代

1839年、フランスのブルターニュ地方、ナント市に生まれた彼女は、洗礼名をエレーヌと名づけられました。5人兄弟の末っ子で、非常に才能豊かな彼女は「4人の両親」に、とても愛されていました。ル・フォールと呼ばれた古い館に、彼女自身の両親 - Charles de Chapotin de Neuville と Sophie Galbaud du Fort - だけでなく、彼女の叔父と叔母も一緒に、住んでいました。エレーヌは次のように喜んで語っていました。



「私の叔父には6人の子供、男の子がひとり、女の子が5人ありました。私たちは2人の男の子と、3人の女の子で、私は末っ子でした。だから、私が大好きだったル・フォールの古い館には、ぜんぶで11人の子供がいたわけです。だれがだれの兄弟で、だれの姉妹か、わからないくらいでした。私たちは家族のメンバーについていつも4人の親たち、3人の男の子、4人の大きな女の子と4人の小さな女の子が、家族であると話していたものです。私の父、母とは言いませんでした。4人の親た

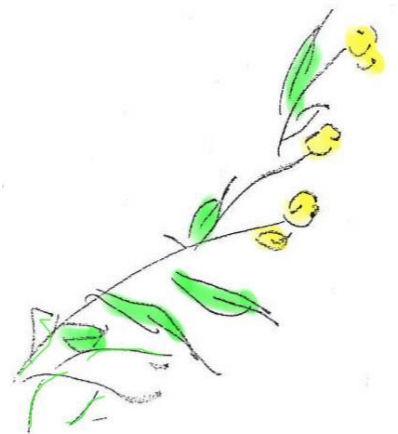
ちのことがしばしば話に出てくるので、初めて私たちと会う人はとても驚いたものでした。このように家族がひとつになっているのを見て、人々はいつも感心していました。」

信仰がこの一致している大家族を導いていました。エレーヌのいとこのひとりがそれを、はっきりと証言してくれています。

「ル・フォールでは、いつも神が一番優先されていました。聖霊の助けなしには、大切な決定はなされませんでした。」

このような環境に恵まれて、エレーヌは優れた教育を受けて成長しました。

「天使か、さもなくば悪魔になるだろう！」と人々が言うほど彼女は対称的な多くの才能をもっていました。活発でいたずらっ子でしたが、力ではなく、むしろ威厳をもってまわりの人々を従わせるような彼女でした。人の目を魅きつける容姿と才能をもっていたので、いつも注目の的であり、とても愛され、大切にされていました。彼女は、服装や人の誉め言葉も気にしていましたが、真実と正直さを生きようとしていました。エレーヌはしばしば自分の独立心が強く、孤独を愛する自立した性格について話していますが、この自尊心と独立心は長所といえます。エレーヌにはその年齢以上の思考能力が与えられていました。このような彼女だったので、5才のときすでに苦しみについて次のような体験をしています。



「私は苦しみが単なる抽象的な考えにすぎない、意志の力で打ち勝つことができるものと考えていました。このことを秘密のうちに確かめてみなければなりません。それで古い誰も使っていない部屋のベッドに横たわって、いとこのひとりに（3、4才年上の）私の手を踏み付けるように頼みました。田舎にすんでいたのも、それはとても重い大きな靴でした。私の手は、ペっしゃんこになり、涙をこらえて痛くないと信じようとしたのですが、どんなに私の勇気と力をふりしぼっても、苦しみが存在することを認めざるを得ませんでした。」

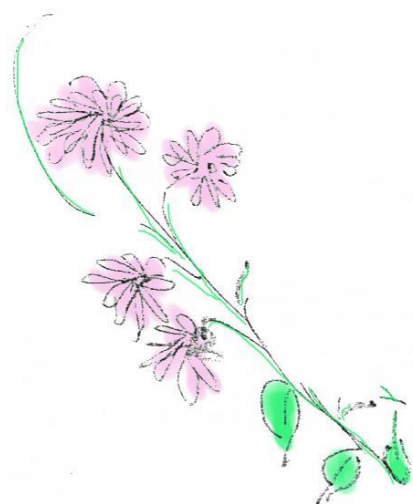
また、小さな子供だったある日には、貧しい人、不運な人を救うために何ができるかを考えて、友達と乞食になってみました。

「私たちは、きれいな洋服をぬいで、破れたぼろを着て顔を汚し、通りにでかけました。将軍の家が近くにあり、そこでは『もう大きいのだから働きにいけるだろう』と言われました。ある婦人の家ではもっと良い待遇を受け、ついには友達が吹き出してしまい、食べ物を差し出していた女中さんをびっくりさせました。この冒険でちょっとのお金をもらいましたが、もちろん私たちはそれを貧しい人にあげました。そうでないと盗みを働いたことになると思えたからです。」

ある晩のことでした。姉の婚約者と口論の後、ベッドに行く前にエレーヌは、主の祈りを祈っていました。「我らがひとにゆるすごとく、我らの罪をゆるしたまえ」というところで、突然止まってしまいました。家族がまだ集まっている客間に降りて行くと、まっすぐに彼女の「敵」である人に向かってまじめに言いました。

「私はあなたのゆるしを願い、またあなたが、私にしたまちがいをゆるさなければ、主の祈りを唱えることができません。そうしなければ、神様は私をゆるしてくださらないでしょう。」

こう言うなり彼女はほっとして、祈りを終えるために戻ったのでした。子供であっても、このような誠実さが彼女のすべての行動に現れていました。



わずか11才のときに、エレーヌは死を身近に体験しました。15才のいとこが死んでしまい、また、姉のマルチンも20才で逝ってしまいました。結婚したばかりのルイズが病気がちであったため、両親はノルマンディーに移り住むことにしました。生まれ故郷のブルターニュから遠く離れ、また幸せだった仲良しグループからも別れて、彼女は孤独を味わう事になりました。その孤独の中で、彼女の人格はまた豊かに育まれていきました。しかし、ルイズは夫と二人の小さな子供たちを残して逝ってしまいました。

(つづく)

私のショウメイと関係のある出来事を思い出すと始まりは6歳の初聖体。ミサが終わり、皆と一緒に記念撮影をしている時に「私は神様のものになったんだ！」という不思議な感覚を味わった。写真の私の顔は自分の内心に触れているような物思いに浸っている。しかしながらその後熱心に教会に通った訳ではない。



二つめは高校2年、期末テストに備えて勉強しなければと思いつつ全くやる気がなかったあの頃。ある日母が購読していたカトリックの雑誌を何気なく開いた時、ひとつの言葉に強くうたれた。「私の時間を他者のために使おう」

自分は人からもよく指摘されるが単純で情熱的な人間だと思う。その一言は私にとってはまさに回心、人生の方向を示してくれた。目的のなかった生活が終わった。その後聖書の言葉「一粒の麦が地に落ちて死ねば豊かな実を結ぶ」に出会った。教会に再び通うきっかけとますます他者のために生きたいという強い望みをいただいた。

私にとって他者とはだれか？その時思い立ったのは障害を持つ子供たちだった。子供たちの教師になろう！具体的な進路が決まった。

数年後、願いがかなって就職したキリスト教の学校では毎朝短い礼拝があった。ある讃美歌のフレーズ「君の賜物と若い力を、神と人のため全て捧げよ」は私の心を強く揺さぶった。何度も歌ううちにこの招きに答えなければと思うようになった。でもどうやって？一生この仕事（知的障がい児の教育）をすることなのか、それとも？その時は結婚して普通の幸せを手に入れたいという夢も自分の中にあった。自分が一体何に召されているのかわからなくなった。

そんな中で出会ったのが私たちの会のシスターである。自分の中にあった修道者のネガティブなイメージを変えてくれた。自然体で単純でオードリー・ヘップバーン主演の映画『尼僧物語』に出てくる表情のないシスターたちではない。初めて友達以外の大人に心の内を話すことができたし、シスター方の話す言葉とそしてその生き方はとても新鮮な響きがあった。自分の抱えているもの、自分で決める人生を手放してみようかなと思った。

修道生活が何を目指しているのか、三誓願どころか教会の教えも知らないのに何故か不安はなかった。家族も友達も所属の教会の神父様も誰も私が修道者になることに期待していなかったと思う。“また帰っておいでね。”軽い別れで新しい生活はスタートした。すべてをなげうったわけではなかったから辛さなどみじんもなかったの



だと思う。今思うと自分の無謀さに恥ずかしくなるが、そんな自分だから神様はこのような形で呼んでくれたのがわかる。

規則正しい祈りを中心とした生活、世代も環境もそしてもちろん性格も異なる姉妹との共同生活などすべてが新鮮で楽しかった。FMMは国際的で派遣された国と地域の必要に応えるというダイナミックな修道会で、存在をもって神の愛を証しすることに呼ばれている。私が何をするのかは重要ではなく、何をしていても神様が私と共におられることを証することが大事なのだという発想に私は大いに惹かれた。こうして海外に派遣されたい望みが私の中でどんどん大きくなっていった。それは何も知らずに修道会に飛び込んだのと同じく、全く自分の弱さや心の闇を見つめること

なく、ただただ光に向かって前進する相変わらずの自分であった。

そのような未熟な修道者が誓願を立てることを許され、海外に派遣された。

日本を離れて毎日の生活を楽しめない自分に出会った。

あまりに違うメンタリティー、大声で話す言葉が嫌いになじめなかった。それゆえ新しい言語の学びが遅々として進まず、人とのコミュニケーションが少なくなり孤独になっていった。そしてそのような状況を受け入れることはとても難しかった。今にしてみれば初期の適応のプロセスなのだが、私は次第に自分のショウメイを疑うようになった。神は私に失敗の体験をさせたいのか、徹底的に自分の弱さを知るために海外に送られたのか、祈りの中で悶々としながら会の長上と対話を重ねて出した結論は日本に帰国してショウメイを見直すことだった。派遣されて1年半が過ぎていた。

ここで私の人生の中で一番大きな神体験が起こった。

海外派遣はローマにある本部からのものなので、修道会の総責任者である会長に手紙を書き日本に帰りたい理由を述べ許可をいただかなければならない。

意を決して手紙を書き始めたが、筆は全く進まない。帰りたくてたまらないのに、本当にそれでいいのかと問いかける声があった。長上からもう一度祈るように勧められ小さな聖堂でひとり聖書を開いた。それはルカによる福音 1:38 “わたしは主のはしためです、お言葉通りになりますように” という本会のモットーであった。

Ecce Ancilla Domini (エッチエ アンチラ ドミニ) 見よ、主のはしため!
この言葉を生きるために私は主に呼ばれたことをその時はっきりと悟った。

そしてこのぼろぼろの光の見えない状況の中でこの言葉を唱えた時に、全身不思議なエネルギーと大きな喜びで満たされた。“わたしは主のはしため”ここで生きることを主は望まれているのだ。Ecce Ancilla Domini、主よ私はここにとどまります！聖堂から飛び出して一気に手紙を書いた。帰るお願いの手紙がこの大きな恵みの体験のわかちあいに変わった。

その後も言葉は上達しなかったが、主の望みに応えている喜びが私を支えてくれた。それからもう19年も年月は流れ、私はまだ海外にいる。

今自分の召命を振り返った時に、主は私が従えるやり方で招き、導いてくれたことがよくわかる。修道生活を重ねるにつれ苦しみやチャレンジも増えた。でも心の底にある深い喜びと望みが毎日を生きる大きな力になっている。このような幸せな人生をくださった神にただただ感謝しかない。



主がお望みになる場所で、お望みになるままに、そう申しませう。
Ecce Ancilla Dominiという言葉こそ、私が全存在をかけて口にし、
また なりたいと思うものだからです。

創立者の言葉より

シスターになるためのステップ

1. 予備志願期 (アスピラント)

神は「来て見よ」(ヨハネ1:39)とされます

修道院を訪れて招きを
確かめてみましょう

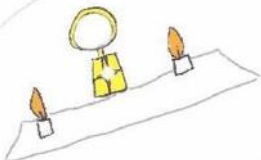


2. 志願期 (プレノビス) 6ヶ月~2年

あなたが私を選んだのではなく
私があなただけを選んだのである (ヨハネ15:16)

ともに生活しながら
神の呼びかけを知るときを過ごします

祈りの生活



会の精神を学ぶ



共同体の生活



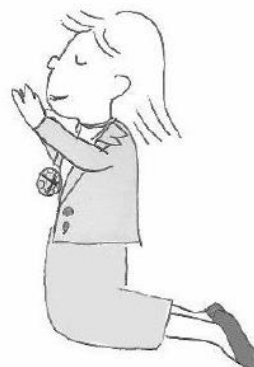
3. 修練期 (ノビス) 2年~2年6ヶ月

修道生活の始まりで
神の呼びかけの意味を深めるときです

4. 有期誓願期 3年～9年

神の呼びかけに応えて“愛の契約”として
清貧、従順、貞潔を誓います

使徒職の場に派遣されます



宣教者として救いの福音を告げるため
どこでも また誰のところにでも行く覚悟です

5. 終生誓願

あますところなく自分自身をゆだねて
生涯の奉獻を誓います



マリアのように「ハイ」と答えて生きるように
私たちは マリアの使命を受け継いでいきます

Universal Mission

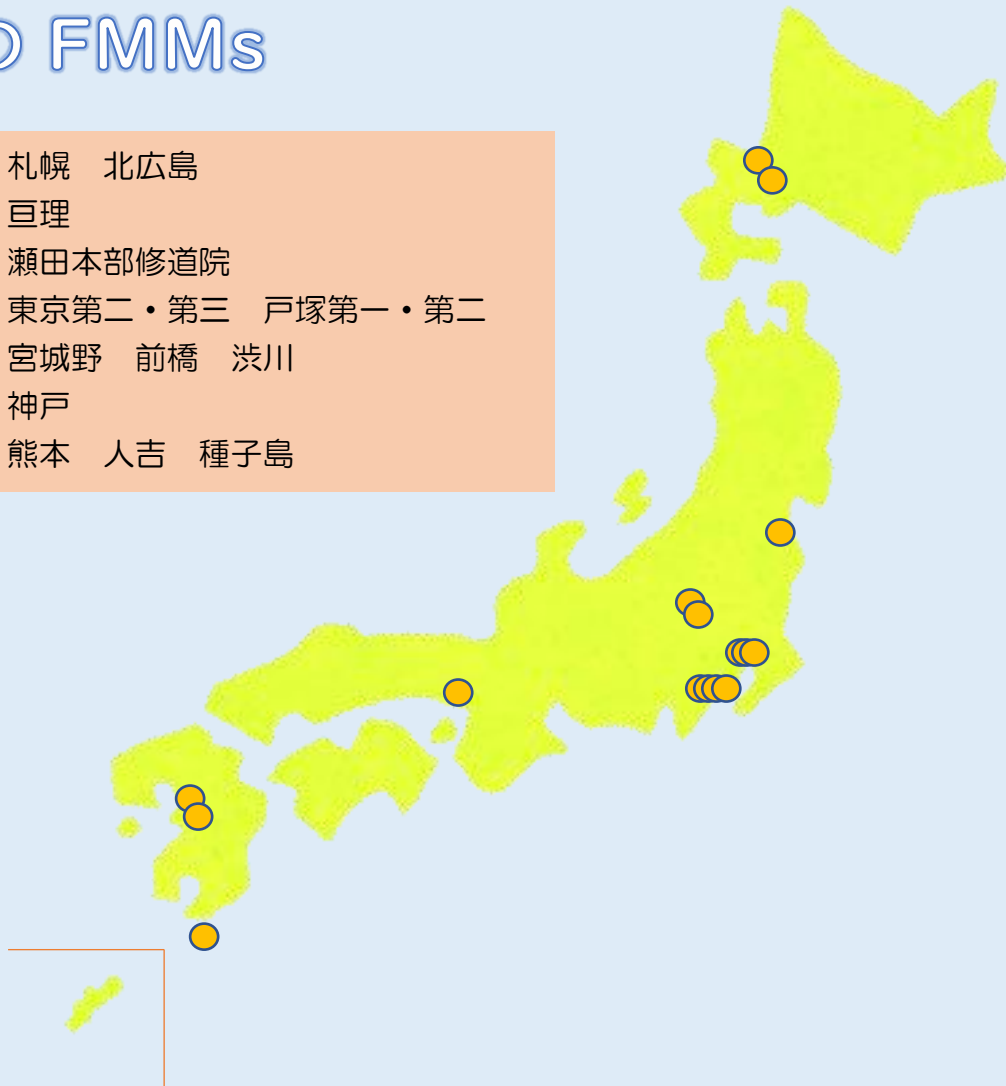


世界宣教に呼ばれているわたしたち

<http://www.fmm.org/>

日本の FMMs

北海道 札幌 北広島
東北 巨理
関東 瀬田本部修道院
東京第二・第三 戸塚第一・第二
宮城野 前橋 渋川
関西 神戸
九州 熊本 人吉 種子島



発行日：2019年11月

発行：マリアの宣教者フランシスコ修道会・召命推進チーム

お問い合わせ：<http://www.fmm.jp/> (お問い合わせフォームよりご連絡ください)